

News Letter 研究大会(岐阜) まとめ

昨年9月23日(日)、日本児童英語教育学会(JASTEC)中部支部では、岐阜・中部学院大学にて定期研究大会を開催した。今回の研究大会の内容には、教師の意図的な活動の中で、児童が英語に慣れ親しみ、言語材料の活動や場面に自然に入り込み、無理なく良質のインプットを受け、さらには、発話の工夫をしながら、他とのコミュニケーションを楽しむことのできる提案がいくつかなされた。

また、多くの準備をすることなく、ちょっとした時間に簡単に英語に親しむことのできる活動案を小グループで考え提案する、といったワークショップも取り入れられていた。

さらに、今回の講演では、岐阜大学の David Barker 先生から「英語は耳から」という内容で様々な視点をいただくことができた。このように、充実した岐阜大会を支えてくださった数々のご発表に感謝している。

(実行委員長 新井謙司)

1. ワークショップ(10:05~10:45) プレゼンター：岩橋加代子〈中部学院大学・(株)ぼ〜ぐなん〉

『子どもの“心が動く”活動を目指して』

Hello, hello, hello, hello
I'm glad to meet you
I'm glad to meet you

と岩橋先生の歌が始まる。「ああ知ってる曲だ」と口ずさみながら聞いていた。歌い終わって岩橋先生が言ったことばが "How many times did I say 'Hello'?"。これにはどきもを抜かれた。「えっ？ だってそんなこと聞かれるなんて思って聞いてないモン。」そこでもう一度みんなで歌いながら "Hello"の回数を数える。会場で8回という人もいれば、9回という人もいれば、11回とも12回とも。そこでもう一度みんなで指を折りながら "Hello"の回数を数える。岩橋先生も指を折って数える。 このあたりから岩橋先生の「意図」が察せられてきた。「そうか！子どもに何回も歌わせたいんだ。」「子どもに何回も歌わせる手なんだ！」このアイデアいただき〜！と思っているときに、岩橋先生の "How many times did I shut my mouth and sang?" の言葉。「ええええ〜！？その回数を見つけるべく、また歌う。「そうかあ、[m]のところを閉じるんだ。」それを発見してもう一度歌う。 何回歌っただろう、この歌。このよく知っている歌を。

岩橋先生の発表のタイトルが「子どもの”心が動く”活動をめざして」だが、こりゃ大人の心、私の心が動いているぞ!!! 人の心を動かすのは大変なことなのに "How many . . . ?"の質問がそれを可能にした。こんな宝を惜しげもなく、いくつか紹介して頂いた。一つの宝を作り出すのにどれだけの時間・労力・愛情・エネルギーを費やしたのだろうかを思ったとき、言えるのはThank you! のことばのみ。本当にありがとうございました。

箕浦永生〈English House〉

歌い慣れている‘いつもの歌’は、ほんの少し切り口を変えると、新鮮な気持ちで繰り返し楽しむことができます。また、子どもにとっては「ゲームみたいな活動」や、学習させられているとは気づかない程なげない自然なやりとりも、その裏には、指導者の練りにねったインプットやアウトプットの計算があります。「子どもが本気になれるコミュニケーション」、「生きたことばのやりとり」「ことばの習得の基盤を築くための質のよいインプット」、これらのことを常に心にとめて、努力していきたいと思えます。

岩橋加代子先生〈中部学院大学・(株)ぼ〜ぐなん〉

2. 実践発表① (10:50~11:20) プレゼンター：尾崎友美〈岐阜大学付属小学校〉

『言語・文化への気付きを促す指導の工夫 ～小学校5・6年生～』

尾崎先生は、授業で取り扱った既習内容を英語活動にアレンジしたり、子どもたちにとって身近に感じている題材を扱った活動を設定され、無理なく子どもたちが思わず英語を発話したくなってしまふ場面を意図的につくられることを大切にしている。そんな尾崎先生の最近のキーワードは「気付き・学び」である。思わず「あっ そうか」「なるほど」と子どもたちが活動を通して発見したり、感じたりすることを意図的に仕組んでいくことに挑戦し続けている。

今回のご発表内容は、大まかに以下のようにまとめられる。

- 1 Which is older? 様々な身近なもの、建物、地元にあるもの、などなどを取り扱いながら、大きな数に慣れ親しむ。years old をmonths やdaysなども取り扱えるようにする。
- 2 社会科や家庭科の学習内容の活用。物の歴史的な背景を伝えて、付加価値を加える。
- 3 地図の県の大きさ Which is larger?
- 4 学校備品 Which is heavier, this one or that one? cheaper? など重さ比べや、長さ比べなどをしながら、言語材料のルールに気づくように促していく。
- 5 高学年では、少し学びを実感できる内容にするために、気づき、学び、なるほど、と感じられる内容を盛り込む。
- 6 今後の小学校の英語活動の方向としては、学びを感じられる内容、英語を通して理解したり、伝えあえたという充実感を持たせられる内容にしていくことが必要。

尾崎先生の明るい話しぶりと軽快に進む発表内容に、参加者も引きつけられ、思わず「なるほど」「あっ 教師の意図はこれだな」と気付きと学びのある発表であった。

新井謙司〈岐阜高山市立松倉中学校〉

3. 実践発表② (11:35~12:05) プレゼンター：西崎有多子〈愛知東邦大学〉

『“Hi, friends!” における「桃太郎」を使ったオリジナル劇の指導』

外国語活動の教材が『英語ノート』から“Hi, friends!”に変更されたことにより、オリジナル劇に関する内容も、教材が「大きなかぶ」から「桃太郎」へ、配当時間数も4時間から6時間へと変更になり、単元目標と各時の指導内容についてもより多くが求められている。教材からオリジナル劇へと導くためには、めあてを設定した読み聞かせ、グループでの作業、発表の機会を与えて意欲を高めることが求められる。どの程度オリジナルな劇を行なうか、ストーリーや登場人物をどうするかなど、学級担任主導で基本を示し、配慮のある指導が必要である。創意工夫を尊重しつつも既修表現を最大限に活用し、負担が大きくならないようにすると共に、卒業前の2年間の総仕上げとしてふさわしい内容としたい。英語劇を行なうことにより、英語が楽しいと思える児童の変容を促し、劇という舞台で相手に伝えたい気持ちを英語で表現し、一つの目的に向かう学び合いが期待できる。外国語活動の目標の上でも、英語の学びにおいても、英語劇は有効である。

「桃太郎」は民話として日本各地で伝承されてきたこともあり、多くのバリエーションが存在し、登場人物や物にはいろいろな意味が込められている。国語と関連させた指導も可能と思われる。また「桃太郎」は時代と共にその読まれ方が変化した物語としての過去もある。桃太郎は、仲良くつつましく暮らすおじいさんとおばあさんに大切に育てられ、立派な大人の男となり、悪の象徴である鬼を退治して2人の元へ戻って、幸せに暮らす。鬼退治は目的ではなく、立派に成長した証としてのエピソードであり、子どもの健やかな成長こそ皆の願いだったのでないだろうか。

西崎有多子〈愛知東邦大学〉

3. 実践発表③(13:15～13:45) プレゼンター：土田有希〈名古屋市外国語アシスタント〉

『名古屋市における Hi, friends!の活動 ～みんなで楽しく Hi, friends!～』

今回、英語に苦手意識の高い担任達にいかに関わってもらい、短い打合せの中で、毎回、最低限お願いするポイント等を話した。また、名古屋市立宮前小学校の朝日洋介先生のご協力を頂き、「さいころジャンケンゲーム」のデモを行った。実際の活動時と変わらず、発表直前に朝日先生へ依頼したため、より実際の活動に近い形で行えた。「さいころジャンケンゲーム」は、ジャンケンをして勝った人がサイコロを振り、その目を自分のポイントにする。偶然性があり、子供たちは安心して活動することができる。このような活動の時には、担任の先生には、英語を使って盛り上げ役になってもらったり、わからないような雰囲気の場合のみ「確認してみようか」と活動の流れを復習してもらうこともある。そして、最後は、今年度勤務校での活動風景の映像もご覧頂いた。

活発な児童の多い学級であるほど、担任が前に出てクラスコントロールしながら進めていくと上手く活動も行える。その手助けを積極的にできるT2でありたい。

平松貴美子先生をはじめ、ご支援ご協力を頂いた全ての先生方に、お礼を申し上げます。

土田有希〈名古屋市外国語アシスタント〉

4. 小グループワークショップ(14:00～15:00) 司会：加藤拓由〈春日井市立神屋小学校〉

小グループに分かれ、「子どもが思わず英語を口にしたいくなるような活動」のアイデア・シェアリングを行った。短時間であったが、どのグループも活発な話し合いが行われた。以下は各グループから出されたアイデアである。

- 1) Please touch something ～. 「英語版 色おに」
- 2) Number Game 21 「21 を言った人が負け」
- 3) Whose T-shirt is this? 「Tシャツ3ヒント・クイズ」
- 4) Mentalist Game 「数当てゲーム」
- 5) ペアインタビュー 「ドン・じゃんけん」

講師の岩崎先生からは、

- 1) ゲームの進行中も先生が常に英語で質問するなどしてインプットを与え続けること
- 2) 子どもが質問したくなったら、言わせてみること (アウトプットを急がないこと)
- 3) 子ども自身に関する、思わず答えたくなるような身近な質問をすること

という重要な内容を教えていただいた。学生・教員・支援者・研究者など様々な立場の人々が、ともに学びあい、意見の交流が行われ、楽しい学びのひとつを過ごすことができた。

加藤拓由〈春日井市立神屋小学校〉

5. 講演(15:10～16:10) プレゼンター：David Barker〈岐阜大学〉

“ Teaching Learners How to "Take" a Lesson “

I would like to thank all the officers and members of JASTEC for inviting me to give a presentation at the conference. Childhood education is not my area of expertise, so it was interesting to meet so many experienced teachers and presenters. I decided to change the topic of my presentation based on what I saw in the morning sessions, and I was happy to hear that so many of you found it useful.

The key point I was trying to make is that pronunciation is important because it affects your listening ability. English and Japanese have completely different sound systems,

and it is important that children get used to the English system right from the beginning of their studies. Using "katakana" might make things easier in the short term, but it will not help with long-term acquisition. It may even have a negative effect. I hope you will all remember that you do not need to have perfect English pronunciation in order to teach it. As long as you show an awareness of stress timing, word linking, and the "schwa" sound, you will be able to give your students an excellent start in their English learning careers.

David Barker 〈岐阜大学〉

このNEWS LETTERをごらんになった読者の皆様より、ご意見やご感想、そして、JASTEC中部支部へのご要望などがございましたから、下記までご連絡をお寄せください。また、下記の中中部支部HPのアドレスには、これまでのNewsLetterも掲載しております。ご覧ください。

◎ JASTEC中部支部HPアドレス <http://jastec.filsa.net/>

◎ 意見・要望など kenjia1026@ybb.ne.jp

JASTEC中部支部 役員 新井謙司
岐阜県高山市立松倉中学校 教員